



京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター 上演実験シリーズ 2001 vol.1
 山田せつ子《ダンス》× 伊藤高志《映像》 コラボレーション 『DOUBLE / 分身』

2001年12月7日(金) 6:00・8日(土) 2:00・9日(日) 2:00(開場は開演30分前)

シンポジウム「映像・身体・空間」 8日(土) 3:30 公演のチケット半券をご提示ください。出席者：山田せつ子、伊藤高志、小林昌廣、八角聡仁、ほか

会場：京都芸術劇場 studio 21 (京都造形芸術大学内)

* JR「京都」駅/京阪「三条」駅/阪急「河原町」駅から(京都駅からは約50分)京都市バス5番「岩倉」行き乗車「上総町・京都造形芸術大学前」下車

* 市営地下鉄「北大路」駅から(約15分)京都市バス204循環に乗車「上総町・京都造形芸術大学前」下車 + + + + +

* 叡山電鉄「茶山」駅から徒歩10分 * 駐車場はございません + + + + +

予約・問合せ：京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター Kyoto Performing Arts Center TEL：075-791-9437

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116・FAX：075-791-9438・E-mail：info@k-pac.org・URL：k-pac.org

料金：一般/前売3,000円、当日3,500円・学生/前売2,000円、当日2,500円(学生証を当日受付にご提示ください)

前売取扱：チケットぴあ TEL：06-6363-9966(Pコード406-158)・JCDNダンスリザーブ(オンライン予約)http://dance.jcdn.org/

ダンス：山田せつ子 映像：伊藤高志 パラテキスト&コンセプト：八角聡仁

スタッフ/舞台監督：池田ともゆき 照明：岩村原太 サウンドデザイン：稲垣貴士 音響：加藤陽一郎 制作：志賀玲子、橋口薫 主催：京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター

+ + + + +

一つの空間のなかでダンスと映像が二つ折り(double)にされ、現実と虚構、実在と不在の間に棲みついた〈分身=double〉が踊りはじめる。メディア・テクノロジーは身体と空間にどんな断層を見出すのか。ダンスと映像の新しい可能性を探求する実験的コラボレーション。+ + + + +

そこに在るのに、そこに無いもの。ルイス・キャロルの謎めいたこの素朴な自家撞着、あるいは二重性(double)こそ、19世紀に誕生した写真や映画による「映像」の端的な定義にはかならない(ちなみに『不思議の国のアリス』の作者は、写真家でもあった)。イメージそのものは確かにそこに現象していながら、それが表象している当のものはそこには存在せず、いわば似姿にすぎない影のような分身(double)が、実体と離れて跳梁するという奇妙な事態。今日それをさほど不思議だとも思わないのは、私たちの存在自体が、もはや映像との関係なしには考えられなくなっていることの証左でもあるだろう。映像はいまやオリジナルな現実に対して二次的なコピーであるにとどまらず、実物と同じではなくまた異なってもいいという二重性によって、新たな現実を産出しつづけている。それでは、生身の身体と、映像に写しとられた身体、すなわち完璧に似通ったdoubleとしての身体が同じ舞台上で出会うとき、そこに何が生成するのか。しかしその前に、現実の身体そのものが既にdoubleとしてあることを忘れるわけにはいかない。ダンサーにとって身体とは、操作する対象であると同時に、操作の主体としての自己自身でもある。この〈自己の身体〉に潜んだdoubleこそがダンスの根源にあるとすれば、同一性と差異の間に増殖する〈分身〉が折り込まれることで、ダンスと映像の関係は、きわめて錯綜した様相を呈することになるだろう。現在、われわれの身体は明らかに、シンボリックで有機的な統一体としての固有性を奪われ、多様なメディア・テクノロジーとの接合によって、錯綜的なネットワークのなかに分散しようとしている。しかし、そのことで身体が「失われた」と、ノスタルジックに考える必要はない。それは、私たちの身体をめぐる位相が情報環境とともに変化しているということにすぎず、したがって、その変容に相応しい身体の表象を見出し、そこから新たな身体と映像の可能性を探ることこそが喫緊の課題となるだろう。このコラボレーションは、まさしくそのための試みである。+ + + + + 京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科助教授 八角聡仁

<プロフィール> 山田せつ子：『天使館』にて笠井淑氏に師事。繊細なフォルムとイメージの多様性で独自のダンススタイルを確立し、ソロダンスを中心に国内外において高い評価を得ている。ソロ活動に加えダンス・カンパニー『枇杷系』を主宰し、新鮮でのびやかな若手ダンサーを輩出している。主な作品に、「FATHER」「速度/花」「夢見る土地」「階デ踊ル」他。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科助教授。既成のダンスのコードにとらわれることない身体表現の可能性をさぐり、新鮮なダンスフィールドの開拓に力を注いでいる。+ + + + +

伊藤高志：1956年福岡生まれ。83年九州芸術工科大学画像設計学卒業。在学中、映像作家松本俊夫に師事し、実験映画を学び本格的に映画制作を開始。16mm処女作『SPACY』(81)が世界的な評価を得る。その後個人ベースで斬新な作品を次々と発表。視覚的な可能性を突き詰めたその1作1作が世界の注目を集めている。如月小春や森村泰昌とのコラボレーション、石井聡互や林海象の特殊効果映像も担当。日本を代表する先鋭的な映像作家の一人。主な作品：『THUNDER』(82)『ZONE』(95)『モノクローム・ヘッド』(97)『静かな一日』(99)『めまい』(01)。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科教授。+ + + + +



[京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター活動予定]
 * 10/27 講演会「マルチメディア時代の舞台芸術」(レクチャー&ビデオ上映) 講師=ジョン・ジェスラン、高谷史郎(ダムタイプ)
 <studio21> * 12/14-15 ドラマ・リーディング&シンポジウム「フランス現代演劇特集」演出=川村毅、宮沢章夫 <studio21>
 * 2002/2/9-11 劇団第三エロチカ公演『ニッポン・ウォーズ』春秋座ヴァージョン/studio21ヴァージョン 作・演出=川村毅 <春秋座、studio21>
 * 舞台芸術研究センター機関誌 2002年3月創刊
 + + + + +
 photo:shigetada takahashi art direction:yasuyuki nishida (birth*) 2001